

【 6 】

氏 名	岡 本 夏 木 おか もと なつ き
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 77 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 47 年 5 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	発達の観点からみた弁別学習の転移に関する研究

(主 査)
論文調査委員 教授 園 原 太 郎 教授 野 田 又 夫 教授 池 田 義 祐

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、発達の観点より弁別学習の転移を研究していく場合、きわめて中心の問題でありながら、従来の研究ではほとんど注目されずにきた問題を指摘し、実験によるその方法論的探索を行ない、認知・思考の基本的機制的発達研究にとっての一つの方向を示そうとするものである。

弁別学習の転移の問題は従来比較的独立して進められてきた学習・思考の研究分野において両者が早くから共通して扱ってきたものであるが、発達の視点からみると、その知見は貧困である。著者はしかし弁別学習の転移事態は、適切な条件を導入していく場合、知的発達の基礎的機制的解明にきわめて有効な手段になると考え従来の諸研究を発達の観点から検討し、それらに共通して欠けていると思われる条件を積極的に導入していく実験を計画し、認知・思考の基礎的過程の解明を一步進めようとする。

発達の観点から、弁別学習やその転移を成立せしめるものが何かを明らかにするには、従来の諸研究間の相異や抗争点を、より詳細に吟味する実験を企てていくよりも、むしろ、これ迄の諸理論や諸研究に共通してみられる視点とか実験方法の類似点に注目し、そこに欠けていると思われる問題点を見出すところから、「新たに」弁別学習転移の意味を問いなおす作業を始めるべきであろうとし次の三点を指摘する。

- (1) 発達の仮説を検証するための手段として、弁別学習（転移）事態をとりあげ、発達の指標となる実験変数を積極的に導入していく必要がある。
- (2) 従来順向的過程のみで考えられてきた転移ということは検査事態に接することによって、先行の訓練時経験が意味がえされ、再構成されていく逆向的機制も働いていると考えなければならぬ。
特に発達には、そうした一方向的転移の段階から、逆向的再構成が可能となる段階へと進んでいく過程にあるといえるからこのような逆向的促進機制を明らかにしていくような実験構成が必要であろう。
- (3) 従来の弁別学習実験では、刺激系条件の実験的操作が関心の中心となってきたことは当然としても、そこでは反応的側面は全くの従属変数としての位置しか与えられていなかった。しかし、刺激を刺激として成立せしめる機制や、転移そのものを可能にしていく機制をとらえるのには、反応系条件をも

重視し、それらをも実験変数として導入していくことが必要であろう。そして、刺激系・反応系両条件の相互作用の現われ方に弁別学習転移の意味をたずねていくことが、発達の観点に立つ研究を進めるにあたって、より生産的な役割を果たすことになると思われる。

上のような視点に立って、著者は三つの実験を行なう。

第Ⅰ実験

刺激対として、大小四角対や、大小円対のほかに、母子像対や3・2対を用い、4, 5, 6歳の幼稚園児に次のように条件による転移をしらべてみた。条件Aでは、訓練対として大小四角対を用い、それから検査対としての大小円対への転移、条件Bでは、大小四角対から母子像対へ、条件Cでは、逆に母子像対から大小四角対へ、条件Dでは、母子像対から3・2対への転移を検討してみた。その結果、4歳児では条件Aのみ、5歳児では条件Aと条件C、6歳児では条件A, B, Cが転移可能であった。このことから

- (1) 主として情報処理が知覚的水準で営まれ、言語的記号化が自発的に参加することが少ない段階
- (2) 言語的記号化が参加しはじめ、それを手がかりとした反応が可能になり、言語的媒介効果があらわれはじめるが、それがいまだ概念的概括構造によって支えられていない段階（たとえばそこでは、「AはB属性をもつ」ということの理解における処理は可能になってきても、「B属性をもつもの（クラス）の一つとしてのA（メンバー）」という理解における情報処理は困難である。）
- (3) 概念的構造が成立し、その枠組に支えられて言語的 cue system が機能化してくる段階の三つの段階があることがわかりよくいわれる「言語的媒介過程」の意味のあいまいさも明らかにされる。

第Ⅱ実験

上の第Ⅰ実験の条件B, C等での転移が可能になるためには、検査事態において、訓練時経験が逆方向的に再構成される必要があることが示唆されたが、第Ⅱ実験では、こうした逆方向的促進効果の可能なcue systemの発達をしらべようとした。

多次元的に規定された訓練刺激対（たとえば、黄の大円と青の小円）の手がかりの中から、検査刺激対（たとえば、ともに赤の大小正方形対や、大きさは同じで色が黄と青の正三角形対）の要請に応じて有効な手がかりをとり出すことによって転移が成功する事態を5歳と6歳の幼稚園児に与え、その結果こうした転移は6歳児になるときわめて容易になることがわかった。この実験は逆方向的促進過程が発達的にきわめて重要でありながら、従来見落されてきた機制を指摘するものである。

第Ⅲ実験

反応系条件を実験変数として組みこむ実験として、これまでにラベリング実験の名の下に行なわれていた刺激属性の言語化条件と、他方Luriaたちの行動調整のための言語化条件とをとりあげ、その効果を逆転的学習事態をとおして検討してみた。すなわち、継時的に呈示される黑白カードのいずれか一方に、ジャンケンの「石」、他方に「紙」の動作を結びつける訓練を行ない、その際、「クロ」「シロ」と刺激を言語化する群と、「グ」「パ」と自分の動作を言語化させていく群とを作り、これを幼稚園年長児で、MA6:10以上の上位群と、6:10以下の下位群に実施し、さらに訓練完成后、刺激と動作の組合せを逆転させてみると、全般的には刺激属性を言語化した群よりも、動作反応を言語化した群の方が、逆転は有利となり、とくにMA6:10以下の子どもではこの傾向がいちじるしく、刺激言語化群では、むしろ阻害効

果さえみられた。この実験で用いた刺激材料が一次元の単純なものであったため、その言語化の効果が小さかったとも考えられるが、逆転が容易になるということは、単に刺激に対して反応をばスイッチするという過程よりも、自己の正反応のシンボルとしてとらえた刺激を逆転させる過程が成立するのによるのではないかということが推測された。

これらの実験は何れも著者のいう新しい視点による実験変数の導入が、従来の研究において看過されてきた重要な機制を指摘するものであり、今後の研究を方向づけるものであろうという。

論文審査の結果の要旨

著者は弁別学習の転移の問題が、非常に多くの実験的研究にもかかわらず、学習理論の中での論争をめぐって進められて来た事情が転移を成立せしめる重要な機制を看過せしめ、このことがこの問題の発達的研究をも貧困ならしめているとし、発達の観点からは従来の諸理論や研究に欠けていた視点と実験変数を積極的に導入し、転移や弁別学習を成立せしめる基本的な重要な機制について、発達の的に解明すべきであるという。その重要な機制としては、一つは逆向的転移であり、他は刺激系反応系の相互作用であり、学習の発達の編成を明らかにするために重視さるべきであるとし、これらを実験変数として導入した自家の研究を展開している。このようにして発達に関する重要な課題を明示し生産的な研究領域と課題とを拓いたものとして評価に値する。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。